

現代語「からに」について

東, 秀吉
熊本県立人吉高校教諭

<https://doi.org/10.15017/12389>

出版情報 : 語文研究. 2, pp.33-38, 1955-05-10. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

現代語「からに」について

東 秀 吉

一

およそ言語といふものは常に変転するものであつて、寸刻も静止することのないものである。現代語を構成する一つ一つの語の意味なり、機能なりも常に一定不変なものではなく、時代と共に、また場所と共に変転して行く。一つの単語の意味、機能も、それが或る時期に於いて把握せられ、記述せられたまゝの意味なり、機能なりを常に保ち続けるものとは限らない。また或る時期に於ける或る語の姿を握んだとしても、その語の意味、機能が、その語の多くの用例から帰納せられたものである以上―事実、語の意味や機能はかうして把握せられ、整理せられ、記述せられたものであるが―、それと異つた使ひ方が生じた後に於いては、もはやその語は過去に記述せられた以外の意味、機能を持つてゐるものといはなければならぬ。最近見られる表現なり、語法なりに、この種のものがかなり、見受けられよう。

かくて、その動搖し変転する語を、その静止の状態に於いてとらへ、こゝに法則を見出しこれを整理し、記述することが文法学の任務であり、責任であるとするならば、現代語文法のあり方は、それを規範的なものと見るのではなく、むしろ、現実の状態の厳密正確な把握から出発しなければなるまい。

こゝで問題にしようとしてゐる現代語「からに」の考察などもその一つの例であつて、本稿はこの語に一つの位置附けを行はうとするさうやかな試みである。

二

見るからに好感が持てる。
見るからに立派な青年だ。
などと使用せられる「からに」は如何なる性質を有する語であらうか。この語は古くは、

① 動詞の連体形（吹く、取る、触る、見る）

② 形容詞の連体形(恋しき)

③ 助動詞の連体形(隔てし、見し、二身たる。)

④ 助詞(咲ますが、隔つが、越ゆるが、取るが、宿たるが、一夜の、かくのみ)

等種々の語に附いてゐる。然してこれらの「カラニ」は古く、「故に」、「ために」、或ひは「によつて」等の意味を表はすものと考へられてゐたが、最近、大野晋氏は、これらの解釈に異見を提出され、

「だけで」、「ばかりで」、「やいなや」、「にすぎないのに」といふ訳語が適切であり、またこれによつてはじめて歌の意の通ずるものがすくなくない。

とし、更に、奈良・平安時代のコロ(自)の存在に注目せられ、これが「自然」又は「ひとり」の意味を有し、原因、出発点を示す「カラ」と密接な関係があるといひ、

「カラ」と「コロ」とが「自」に当るとすれば、そこから「自然に」、「ひとりで」といふ意味が展開して来よう。(「カラ」と「カラニ」の古い意味について、四)と説かれた。

現代語「カラニ」も亦「や否や」または「ただけ」の意味を有し、前記の例も「見るや否や」または「見ただけ」の意味を表はすものゝやうである。

然して、

見るからに好感が持てる。

の場合、「見るからに」は「好感」といふ体言を修飾してゐるのではなく、「好感が持てる」といふ全体を修飾してゐる語であるし、

見るからに立派な青年だ。

の場合の「見るからに」は「立派な青年だ」までを修飾してゐるのではなく、「立派な」といふ形容詞だけを修飾してゐること、「見るからに立派だ」となし得る点から明らかである。

かう見て来ると、「見るからに」は用言又は用言に準ずる語を修飾する連用修飾語をなしてゐることは疑ひ得ないであらう。さてそれならば、「見るからに」の「からに」は如何なる性質のものかといふに、「からに」は如何なる既成の単語の中にもこれを見出すことの出来ないものであるから、二語か三語かの複合して出来たものと考へられる。若しさうならば、それは明らかに「から」と「に」との複合語に相違ないであらう。

さて、その場合の「から」に就いては二つのことが考へられよう。その一は格助詞として、その二は持続助詞としてである。格助詞「から」は、語源はどうであれ、現代語としては、体言又は体言と同資格の語に附いて、動作作用

の出発点、出どころを表はすことがこの語の最も普通の用法であつて、

会議は三時から始まる。

東京から帰る。

等がそれである。またあまり普通の言ひ方とはいへないが、

起きるから寝るまで働き通した。(山田博士の例)

などの場合はいふまでもなく「起きるトキから寝るトキまで」の意味で「から」の働きに変わりはない。更にこの「から」は

この点からシテ次のやうに考へる。

などのやうに「から」に形式用言「する」を附けて「から」の意味を一層強めて表現するのに用ゐられる。

なほ、

なほ、

あいつは風からシテ好かぬ。(山田博士の例)

のやうな言ひ方も生れて来た。これは「風采から見ても好かぬ」の意味で、形式動詞「する」が「見る」の代りをつとめてゐる訳であるが、なほ「から」の本性にはそむかない。

次に接続助詞「から」は用言又は助動詞(の終止形)に附いて、原因、理由等を表はす。

雨が降つたから道がドロコダ。

天氣がよいから散歩に出かけよう。

即ち「道がドロコになつた」原因又は理由は「雨が降つた」ことにあるとし、また「散歩に出かける」ことの理由として「天氣がよい」ことを挙げてゐる。この「から」は厳密にいへば異なるが大體、「ので」と言ひかへても差支へない場合も多いやうである。また、

学校から歸つてから遊びに出かけた。

の例に見るやうに「して後」の意味に用ゐられる「から」もこの類の接続助詞と考へられる。

次に「に」は色々の場合が考へられようが、この場合の「に」は格助詞と考へて先づ間違ひはあるまい。格助詞「に」が体言に附いた場合はすべて、

机の上に本を載せる。

六時に起きる。

東京に住む。

のやうに「に」の附いた語は連用修飾語をなして「机の上に」、「六時に」、「東京に」がそれぞれ「載せる」、「起きる」、「住む」を修飾すること、「静かに載せる」、「早く起きる」、「しばらく住む」の「静かに」、「早く」、「しばらく」の「載せる」、「起きる」、「住む」を修飾する機能と同じである。さらに、この「に」は、

研究に行く。

話を聞きに来る。

叱られに行つたやうなものだ。(山田博士の例)

といふ風に、動詞や助動詞に附いた場合にも同じく連用修飾語を作ること、体言に附いた場合と同様である。

かう考へて来ると、「に」は体言や用言その他の語に附いて、これらの語を副詞のやうに、或いは形容詞、形容動詞の連用形のやうに、連用修飾語化する機能を有する語であると考へるであらう。

三

翻つて「見るからに」の場合の「から」の語性を考へて見るに、先づその接続の上からは「見る」といふ用言に附いてゐるから一応接続助詞のやうにも見えるが、格助詞「から」も用言(の連体形)に附く場合のあること前述の通りであるから、単に接続の上からだけではこれを決定することは出来ない。(但し、格助詞と接続助詞とはその接続の形が異なるが、この場合は終止、連体同形であるから決定不可能である。)

次に意味の上から考へて見るに、「見るので、好感が持てる」、「見るので立派な青年だ」、或いは、「見るゆゑに好感が持てる」、「見るゆゑに立派な青年だ」の意味とは

どうしても考へられない。即ち、「好感が持てる」「立派な青年である」のは「見る」といふ原因もしくは理由によつてさうなるのではないことは明らかである。さうして見ると、この場合の「から」は原因、理由等を表はす接続助詞とは考へられないであらう。

さて転じてこれを「見るコトから好感を持つ」、「見るコトから立派な青年といふことが分る」とは解し得られないか。言ひ換へるならば「好感を持つ」のは「見る」といふコトから起るのであり、「立派な青年だ」といふことは「見る」コトから分るのだと考へられないだらうか。若しさう考へることが許されるならば、この「から」は明らかにものごとの起り、出どころを示す格助詞だといはなければならぬ。

更に、この「から」に続いてゐる格助詞「に」が如何なる働きをしてゐるかといふに、「見るからに」の場合から「に」を省いて、

見るから好感が持てる。

見るから立派な青年だ。

のやうに單なる「見るから」だけでは「見るノデ」、「見るユエに」といふ風に「好感が持てる」、「立派な青年である」ことの原因又は理由として「見る」ことを挙げてゐることになつて、「見るコトから」好感が持てる、「見る

コトから「立派な青年といふことが分るとは解し難い。また、「見るから」の「から」を格助詞として見ても単なる「見るから」だけでは、

見るコトから好感を持つ。
見るコトから立派だと分る。

といふ風に、動詞の表はず動作の出発点、出どころを示すだけである。ところが「見るから」に格助詞「に」が附いて「見るからに」となることに依つて、

見るからに好感が持てる。
見るからにすばらしい。
見るからに立派だ。
見るからに楽しさうだ。

といふやうに、動詞にせよ、形容詞、形容動詞、助動詞にせよ、すべて動作を表はすものでなく、状態を表はす語の修飾語に立つに到るのである。

見るからに好感を持つ。
見るからにすばらしいと思ふ。
見るからに立派だと思ふ。
見るからに楽しく遊ぶ。

などといふ表現は普通ではない。若しさういふ表現を故意にしたとしても、「見るからに」の修飾する語は、「持つ」、「見る」、「遊ぶ」などではなくて「好感を持つ」状態で

あり、「すばらしい」、「立派だ」、「楽しく」ある状態なのである。即ち「見るからに」はかゝる状態性の語を修飾する働きをなすものであつて、動作性の語の修飾をするものではない。

四

かう考へると、この場合の格助詞「に」は「見るから」の「から」といふ抽象的な「点」に一つの「場」を与へることに依つて、かゝる状態性の語の目標を示すと共に、「見るから」を副詞化する―連用修飾語化する働きをなすものであると考へられる。然してこの「からに」は、「からに」に「に」が附いただけではなく―即ち「から」の持つてゐる働き、「に」の持つてゐる働きの単なる合計ではなく、「から」と「に」とが渾然一体に融和合体してこゝに「からに」となり、こゝに新しく、「好感が持てる」、「立派だ」といふ状態性の語を修飾する機能を有するに到つたと思ふのである。

なほ、このやうな働きを持つ「からに」は他には「聞く」に附いて、
聞くからに気の毒な話だ。

など、用ゐられる位のもので、古語の「カラニ」と異つ

て、用例は極めて少い。

さて、かうして出来上つた「見るからに」、「聞くからに」の「からに」といふ語は、他の助詞のやうに自由に他の語に附くことは現代語としては見られないのであつて、古語に見るやうな種々の語に附く用例はないのである。

この点から「からに」は複合助詞として、独立性の少いこと、即ち他の語に自由に付き得ないことが指摘せられるであらう。

(本稿は昭和二十九年五月、九州大学国語国文学会に於いて発表したものに手を加へたものである。)